

高等学校地理歴史科における北方史の視点

- 北海道中世史から -

小川正樹(函館ラ・サール中学・高等学校教諭)

はじめに

第1章 現行教科書の記述と問題点

第2章 現在の研究成果の導入について

第3章 生徒との共同作業を通じた歴史理解

おわりに

はじめに

近年、歴史研究や考古学の研究成果が教科書にも反映されるようになり、日本列島の多様性に対する認識が深まり、北海道においても本州とは異なる歴史をたどってきていることを生徒に説明することは比較的容易になってきている。これは、北方世界の研究が進み、その研究成果の公開、刊行がさかんになったことが大きく影響している。歴史教科書においては、日本列島をすべてまとめて1つと考える見方から、それぞれの地域の特殊性を考慮して日本をとらえる見方へと変化してきているが、この中で、北方世界と深いつながりを持つ北海道の記述は大きな問題を抱えている。本稿では、教科書記述の問題点を明らかにしていくとともに、それを克服する具体的な取り組みを、筆者がこれまで参加してきた研究会やシンポジウム、調査・研究活動を通じて検討していきたい。具体的には、北海道のアイヌ社会に対する見方を是正するとともに、北方世界に対する最新の歴史研究の成果をうけて、北方世界とのつながりの中から北海道および日本列島全体の歴史を理解することが本稿の目的である。また、一国的になりがちな歴史教科書の記述に警鐘を鳴らし、日本列島全体の歴史が北東アジア全体の歴史と不可分に結びついており、地域の歴史から世界の歴史を考えることが可能であることを検討することも本稿の目的である。

第1章 現行教科書の記述と問題点

現在、高等学校で使用されている日本史Bの教科書の中で、北海道を中心とする北方世界の記述について、中世を中心に概略をまとめると、

和人の進出、道南十二館の成立、海産物取引

和人の搾取に対するアイヌの蜂起と武田信広(蠣崎氏)による鎮圧と北海道支配

近世松前藩の成立と支配

となり、現在使用されている12冊の日本史B教科書のうち、道南十二館に言及、あるいは図版等で説明しているものは7冊あり、半数以上の教科書が和人=日本人の道南進出というテーマを取り上げている。しかし、教科書の限られた行数の中で、これまでの研究成果を記述するには、用語説明を中心にせざるを得ない状況である。それは、和人進出・アイヌへの搾取 アイヌの蜂起・鎮圧 和人の支配強化という一連の和人の征服過程であり、和人側からの視点で記述され、アイヌ社会からの視点、アイヌ社会についての記述は皆無という状況である。こうした和人側からの記述による教科書を読み、かつそうした視点からの授業を受けた高校生は、果

たしてアイヌ社会に対してどのようなイメージを抱くであろうか。おそらく、アイヌ社会は遅れた社会であり、アイヌは和人たちから一方的に搾取され、支配されてきたというイメージが定着する可能性が高い。現段階でアイヌ社会に対して、限られた行数の中で、できる限り研究成果を反映させる記述は、むしろアイヌ社会に対する認識を歪めてしまう危険性があるといわざるを得ない。特に、大学入試を意識して授業をおこなっている学校では、入試必須事項の説明を重視し、アイヌ社会そのものに対する記述ではなく、アイヌの人々に対する支配方法、その名称、その変化が重要になり、これに対するアイヌの戦い、という知識の羅列に終始しかねない状況である。この状況下で、アイヌ社会に対する認識は歪んだものとならざるを得ない。和人とアイヌの関係を正確に認識することは日本列島の多様性や地域性を再認識させることであり、さらには日本列島の歴史を客観的に考える習慣を身につけさせることになることを、日本史の授業では目指していかなければならない。

北海道においては、アイヌ社会の歴史をどのようにして学校の授業に取り入れるかという問題に対して、いくつかの有効な取り組みがある。第1は、アイヌ文化振興財団の編集した教授資料と山川出版社が発行した副読本、第2は北海道日本史教育研究会のこれまでの研究活動の記録集、第3は創童舎が出版したアイヌの歴史と文化に関する2冊の本である。第1は、アイヌ社会の歴史を学校の授業で取り上げる際の重要な資料とその説明をまとめたもので、教科書の記述とは異なり、アイヌと日本人の関係を体系的に説明している。この資料から授業用プリントを作成し、生徒にアイヌと日本人の関係を考えさせることで、アイヌ社会に対する一方的な見方を是正することが可能である。さらに第2の研究成果や、第3の専門書の発行においても、アイヌ社会や文化に関する話題を豊富に提供し、生徒の興味関心を引き出し、アイヌ社会への理解を深めることは十分に可能である。こうした、日本列島の中にあり、日本文化とは異なる文化を持つ人々の存在を認め、それを尊重していく姿勢こそ国際化を目指すうえで必要不可欠な要素であり、現在の日本人にとって一番必要なことである。こうした認識こそが日本人の国際化、国際感覚育成につながると筆者は考える。単なる知識から、国際理解のための重要な問題としてアイヌ社会と文化を学習することが、今後ますます重要となってくる。こうした取り組みを継続し、かつ発信していくことが北海道で歴史教育に携わる者の責務であり、今回の報告により、その責務の一部を果たすことができることを期待する。

第2章 現在の研究成果の導入について

最新の大学等の研究機関での研究成果を高校現場に反映させようとする試みは、近年様々な形で実施されてきている。ここでは、筆者がこれまで参加してきたいくつかの研究会について紹介するとともに、今後の展望について筆者の見解をまとめてみたい。

大阪大学文学部21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」では、「世界史」の新しい研究方法を構築し、最新の歴史学により高等学校世界史教育を刷新する方法の開発を目指し、全国高等学校歴史教員研修会を開催した。ここで、桃木至朗教授は、高等学校の授業の中で、日本史と世界史を横断する必要性を東南アジア史をテーマに説明し、続いて森安孝夫教授も、世界史の中における中央ユーラシア史の意義を説明し、教科書記述の問題点を鋭く指摘した。ここで重要な点は、従来、周辺として一括して説明されてきた地域が、実は世界史の中で重要な役割を果たしていることを、具体的事例を挙げて証明し、従来の世界史像の修正を迫っていることである。こうした視点は、日本史の中においても同様であり、北海道はこれまで日本列島の北方の辺境という認識のもとで扱われてきたが、視点をより広域に設定して、北東アジア全体の中における北海道として認識すべきである。文部科学省の特定領域研究「中世考古学の総合的研究 - 学融合を目指した新領域創造」は近年の歴史学、考古学の研究成果から、中世の日本列島はユーラシア大陸と密接に結びついていることを様々な研究活動から明らかにし、その研究内容を公開シンポジウム「中世総合資料学と歴史教育 - 北方世界の交流と変容 - 」で紹介した。このシンポジウムでは日本列島、特に北海道の歴史を日本一国のみでとらえるのではなく、広く北東アジアの視点でとらえる発表がおこなわれた。北海道は日本の朝廷との関係から説明がなされてきたが、むしろ広大な北方世界、環オホーツク海世界との関係で説明するべきであり、日本列島中心の単線的な歴史叙述を改め、地域社会の視点、交易や交流を中心とした歴史叙述の必要性が強調された。

地域の視点を日本史全体に反映させていく取り組みとして、北海道上ノ国町教育委員会の勝山館跡の研究活動をあげることができる。この勝山館はこれまでの北海道中世史の見方を大きく変えてきた。北海道高等学校日本史教育研究会は第二十二回研究大会を開催し、従来の北海道中世史への評価を大きく改めるシンポジウム

をおこなった。勝山館跡からは、中国産陶磁器のみならず、東南アジアの陶磁器や中国の銅銭も多数発見されており、このことから、勝山館の和人社会は日本列島との交易を通じて、中国や東南アジアともつながっていたことがわかってきた。そして、勝山館跡周辺からはアイヌに関する遺物も多く出土し、多くのアイヌが居住していたことが明らかにされ、これにより、勝山館はアイヌをはじめとする広大な北方世界と結び付いていたことが明らかになった。つまり、この勝山館は北方世界と日本列島、東アジア世界を結ぶ接点であり、ここを舞台に活発な交易活動が展開されていたのである。さらに、アイヌの骨角器やアイヌが所有していたことを示す「しろし」のついた陶磁器が館の内部や館周辺の非常に近い所から発見されたこと、勝山館後方の和人の墓の間からアイヌの墓が発見されたことを総合的に判断すると、勝山館内部にいたアイヌは、和人と共同生活をしており、かつその存在は十分に尊重されていて、決して支配されていた人々としての扱いを受けていたものではないと考えることができる。アイヌは和人にとって重要な交易相手であり、和人はアイヌとの友好関係なしにはその社会を維持することは困難であったのである。しかし、こうした北海道の中世の様子は、日本史の教科書には全く反映されておらず、アイヌを通じて和人が接していた広大な北方世界について想像することを不可能にしてしまう。北海道のみならず、広大な北方世界に対する正確な記述と説明は、日本人とアイヌ、ロシア、北方少数民族との関係を見直し、友好関係を築いていくヒントを提供してくれる。北海道をはじめとする北方世界の歴史の発掘と発表が今後、北海道の教育界にとって重要な課題であり、こうした取り組みはすでに、北海道の高等学校の日本史・世界史研究会によりおこなわれており、北海道から全国へ重要なメッセージを送り続けている。北海道で歴史教育に携わる教員は、こうした成果を授業に反映させながら、北方世界から日本史・世界史を考える視点の構築をより積極的にこなしていかなければならない。

第3章 生徒との共同作業を通じた歴史理解

歴史研究を生徒とともにこない、生徒が主体的に歴史研究に関わった取り組みとして、平成18年度、筆者と本校生徒が応募した「全国中・高校生歴史サミット2006」があげられる。これは、高校生の視点を歴史研究に反映させる試みで、高校生自らが現地調査をおこない、その調査結果を高校生が斬新なアイデアで発表するというものであった。この歴史サミットに参加した狙いは、発掘現場の最前線の研究成果を高校生に紹介し、それを日本史の授業に反映させるとともに、歴史を自分たちに身近なものとして認識してもらうことであり、結果としてこの狙いは十分に達成されることになった。参加した生徒たちは遺跡の現地調査、研究者との直接的交流、多くの研究報告書、先行研究の調査を通して、自分たちの生活する北海道には本州にも劣らない中世の歴史が存在していたことを再認識したとともに、日本列島の中の北海道ではなく、北東アジアの中の北海道から日本列島を考える可能性を追求していくことになった。限られた遺跡・遺物の中から、中世の姿を復元することは容易ではなく、遺跡や遺物以外の多くの資料を使用せざるをえず、これが本校の提出原稿の限界であったが、本校生徒が実際に調査したのは遺跡だけではなく、図書館・博物館であり、現場から図書館・博物館まで、利用できる施設をすべて利用して、自分たちの見解を作り上げた。図書館等を自分たちの足で歩き回り、認識を十分に深めて仮説を作り上げたことは、歴史サミットで入賞することよりも大きな収穫であった。

この歴史サミットにおいて本校生徒が取り組んだテーマは、志海苔古銭の謎に迫ることであった。古銭についての調査活動をおこなう中で、北海道中世史の見直しをすることになり、最終的には北海道中世における和人とアイヌの関係について再検討することになった。この中で、生徒は中世における北方世界の富の大きさとそこに流れ込んだ銅銭の多さを実感し、和人と取引していたアイヌ社会に対しても、これまでの未開で文明化されていない人々という一方的な見方を打破し、アイヌ社会は、非常に豊かで、かつ高度な文化をもっており、日本列島にとどまらず広く北東アジアとつながりを持っているという認識を獲得していった。教科書にあるアイヌ社会の記述の問題点を克服する鍵が、この歴史サミットの中にあった。しかし、今回、本校の生徒たちが調査、検討した北海道、アイヌ社会についての記述を、現行教科書の中に求めることは不可能であり、むしろ、教科書以外の資料を日本史の授業に反映させることのほうがはるかに有効であることを実感した。さらに、教科書に記載されていない歴史を教えることが、実は教科書の歴史についても説明することになっていることに気付かせることができた。大量の銅銭の流入と流通、活発な交易活動、中国産陶磁器の輸入と使用、沿岸航路による国内流通網の整備、銭の蓄積と金融など、教科書の中世史の経済分野については、志海苔古銭を使用しほとんど説明することが可能である。さらに、志海苔古銭はその交易相手がアイヌ社会、北方少数民族社会

であり、志海苔古銭から中世北方世界、北東アジア世界を説明することまでもが可能であり、中国大陸まで説明することができれば、日本史と世界史を融合させた歴史の説明が可能となる。つまり、北海道の歴史から日本史と世界史を考えることが十分可能となるのである。これこそ最近の歴史学界が求めている方向性であり、高校の教育現場で一番工夫していかなければならない課題である。

おわりに

本稿においては、高等学校日本史Bの教科書の記述内容を検討することから始まり、教科書記述の問題点とその限界を明らかにしてきた。現在生徒が使用している教科書は、できる限り地方・地域の視点を取り入れてはいるが、説明が不十分な取り入れ方はかえって生徒に誤った認識を持たせる危険性があることがわかった。また、様々な歴史学・考古学の研究成果を調査することにより、教科書に記載されている歴史的事実の多くが地方にもそれぞれ存在しており、地域独自の歴史を学ぶことが、地域のみならず日本列島全体の歴史を学ぶことになることも明らかにしてきた。特に、筆者のいる北海道は、日本列島の北辺という認識だけでは説明しきれない歴史があり、むしろ北方世界の南辺としての認識が、日本中世史の認識をより豊かにし、一国的な教科書記述の弊害を打破する可能性を持っていることを明らかにした。こうした取り組みが日本各地でおこなわれ、一国的な教科書に対し、記述内容の修正を迫ることが、日本の歴史教育を変えていくことになる。地域から日本全体を考える方法の研究が、今後ますます活発になり、日本列島のみならず広くアジア全域の歴史と日本の歴史を結びつけたとき、私たちはさらに豊かな日本の歴史を知ることになり、周辺地域との交流の歴史を全体の視点で理解することは、国際理解にとって極めて有効であることを実感するはずである。広大で豊かな北方世界、アイヌ社会と日本列島の交流の歴史、中世のみならず近世、近代における北方世界に対する認識を深め、それを高等学校の歴史教育に反映させていくことが筆者のこれからの研究課題である。

【参考文献】

- 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構『アイヌ民族に関する指導資料』（2000年）
 田端宏・桑原真人監修『アイヌ民族の歴史と文化』山川出版社（2000年）
 人間田宣夫・小林真人・斉藤利男編『北の内海世界 - 北奥羽・蝦夷ヶ島と地域諸集団』山川出版社（1999年）
 榎森進編『アイヌの歴史と文化』創童舎（2003年）
 榎森進編『アイヌの歴史と文化』創童舎（2004年）
 桃木至朗『歴史世界としての東南アジア』（世界史リブレット12）山川出版社（1996年）
 森安孝夫『シルクロードと唐帝国』講談社（2007年）
 天野哲也・臼杵勲・菊池俊彦編『北方世界の交流と変容 - 中世の北東アジアと日本列島』山川出版社（2006年）
 上ノ国町教育委員会『史跡上之国町勝山館跡 ~ 』（1980~2005年）
 上ノ国町教育委員会『夷王山墳墓群（1、2）』（1984、1991年）
 松崎水穂「勝山館跡とその城下の謎 - 発掘調査20年の成果と課題」『北から見直す日本史』大和書房（2001年）
 松崎水穂「上ノ国町・勝山館跡発掘のアイヌ資料」『北太平洋の先住民交易と工芸』思文閣出版（2003年）
 中央大学全国中・高校生歴史サミット実行委員会『全国中・高校生歴史サミット2006 - みんなで探ろう城と町 - 』発表資料集・応募論文集（2006年）